

た。葉なども新葉を好まなかった。腫物などが出来ると、子供時代から親しんだものを、わざ／＼郷里から取寄せて使った。町中が嫌いで郊外の村を好んだ。平家を好んで、陽の差し込む部屋を嫌ふ風であった。おちついた渋味の勝った調度を好んで、金色に彩られた器物には目も呉れなかった。干菓子に、古い色の茶器からしたみ落とされた玉露に親しむ風であった。

どちらかと言へば洋楽を好んだが、自分としては楽器はもたなかった。聴く力を持ちたいとよく言っていた。

嫁いだ妹が稽古初めの三味線を、くさしながらも耳を傾けて居た。蓄音機を欲がって或る時は銀座まで出掛けて、色々のカタログを集めて来て、結局フランスキックがいいからと一人できめて居たが、当時の経済が許さなかった為に、その俥に、近く自身の童謡がレコードに吹き込まれたま、それさへ聴く機を得ないで眠った。

病床を慰めやうと私達だけで、そつと一台のフランスキックを求めやうとした。が兄は賢沢視して死ぬまで許さなかった。

芝居は余り見なかった。大先生の省亭画伯のお供をした位と思ふ。寄席には通じて居て恐らく聴きつくしたと言っていた。

先年伊豆の宿で、寄席通の老人との対話の座にゐて、私は兄の寄席通に驚ろいた事があった。従つて座談には長けてゐた。

近年時折暇を見ては落語を聴いて戻った私を前にして、兄はよく、様子を尋ねて、色々説明をして呉れた。

## 海苔の香や医師を厭うてたゞの飯

信頼する以外の医者は、博士でも近づけなかった。看護婦をもさけた。転地も病院も好まなかった。親は勿論、尊敬して居た叔父の

転地のすゝめの言葉もきかなかつた。

郷里に居る遠縁の医者、葉にのみ親しんで居た。前後二回の診察に医者は見放なして居たから、私達は死は知りすぎる程であつても兄は生きる事に一心であつた。

けれども身体を無理に使つた。身の廻りの事は人を使はなかつた。自分で起居してゐた。障子につかまってまで用を達して居た。

四月に這入つて急に病勢が増して、氣も折れた。けれども頭の働きは正反対であつた。付き添つた母と婆やを一時も離さなかつた。母親になじんで幼児のやうになつて行つた。

## 熱計るのみに牀上遅日かな

病中は殊に小児の泣き声を厭つた。絶え得られない様に嫌つた。或る日、泣き続ける小児に耳をやつてゐたが、急に、

「ねー、何家で小児を貸してくれないかな」としみ／＼と言ふのであつた。訳をきけば、

「余り泣いてやかましいから、一つ此方でも泣かせてやらうぢあなにか」と淋しく笑ふのであつた。

それがすむと、しばらくは母や婆やを相手に、病気が直つたらと、直つてからの事を色々とりとめもなく話すが癖になつてゐた。

「直つたら婆やお前を連れて海岸へ保養にゆかう、お前にも苦勞をかけたからな」

婆やは思はずホロリとなつた。

## 君が手のあり／＼、瘦せし火桶かな